



『鉄炮鍛冶 八板金兵衛』

種子島に漂着したポルトガル船（天文12年=1543年）より譲り受けた鉄炮2丁。若き領主、種子島時堯（たねがしまときたか）は強い興味を示し、島の鍛冶屋、八板金兵衛にその複製を命じました。鍛冶屋は見本があれば何でも作れていましたが、今回の依頼は初めて見る長い鉄の筒、鉛の玉を吹き出します。何度も試しながら筒は出来ました。外形は八角形、穴は丸です。しかし、筒の底には見たこともない細工、これは火薬の残骸を吐き出す工夫でネジと呼びます、当時日本にはまだ無かったのです。

筒底のネジを作る事が火縄銃複製の要点となりましたが、方法が判りません。その方法を知るポルトガル人の船長に娘を嫁がせて教わったという逸話も残っています。色々な苦勞の末、一年後には完成します。短期間に複製が出来たのは鍛冶屋が相当な技術をすでに持っていたからです。種子島は古来よりの砂鉄産地で木炭用の林も十分に育つ地域です。鉄器との出会いも古く、弥生時代の遺跡（南種子町広田の浜ノ山）からも鉄製品が出土しています。

『鉄炮記』を主体に文章を書いてきましたが、実は多くの異論があります。伝来した火縄銃は銃の先進地ポルトガルの物ではなく東南アジアで使われたもの。種子島だけに伝わったものではなく、もっと古くから国内（豊後、長門）に伝わったという説もあります。



『鉄炮記』が語る伝来

西村の小浦に船客百余人を乗せた大船が漂着した。大船には五峰（ごほう）という大明の儒生が乗っていて、西村の織部丞（おりべのじょう）と砂上で筆談を交わした。五峰は、船に乗っているのは、西南蛮種の商人で、彼らは交易を求めていると織部丞に伝えた。

その後、大船は島主種子島時堯（たねがしまときたか）のいる赤尾木の港に入った。商人は二人いて、一人を牟良叔舎、もう一人を喜利志多倍孟太といった。両人は持参した鉄炮を時堯の目の前で射撃したが、はじめてみる鉄炮の威力に驚いた時堯は、さっそく二千金という大金を投じて鉄炮を買い入れ、家臣の篠川小四郎に火薬を、鍛冶の八板（やいた）金兵衛に製造法を学ばせて、ついに鉄炮の製造に成功した。

ほどなく鉄炮は紀州の根来（ねごろ）、和泉の堺へと伝わり、さらにそこから日本全国に広まった。これは天文12年（1543）8月、種子島に鉄炮が伝来したという説を伝える、薩摩島津氏に仕えて重用された大龍寺禅僧南浦文之（なんぼぶんし）が著した『鉄炮記』のあらましです。

注記 現在使われている鉄砲の文字ではなく旧来の『鉄炮』を使用しました。

参考資料

織田信長 小和田哲男 編 河出書房新社 2002年

鉄炮伝来 宇田川武久 中公新書 1990年

http://www.city.nishinoomote.kagoshima.jp/kanko_org/tatara/tatara.htm

むらの鍛冶屋®



何でもお気軽にお尋ねください！！

ホームページと電子メールをご利用ください。

URL <http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/>

<http://www.kanamonoya.co.jp/>

ryou@memenet.or.jp